

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第7章 キリストの生涯と働きにおける祈り④



ペテロのための祈り

ペテロのための祈り

クリスチャンが自分のことをどれほど弱く欠けがあると感じていようが、イエスがペテロのために祈られた祈り（ルカ 22:32）は、あらゆるクリスチャンを励ましてくれるものです。悪や邪悪な霊的存在と格闘する際、あるいは、時に自分自身の欲望や情欲の中であって闘う際、信仰による勝利などというものの可能性は、遠く、起こり得そうにないかのように思われるものです。

しかし、イエスは試みというものの力をご存じであり、私たちがそれに圧倒されるのを許してはおられません（I コリント 10:13）。イエスはペテロに対して、私はあなたを真実をもって支えとおっしゃいました（ペテロをシモンと呼ばれていますが、これは、ペテロが自分の力でサタンに立ち向かおうとしていた際にはとても岩と呼べるような者ではなかったからです）。「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ 22:31-32）。



この時、主は、ご自分にとって最も身近な三人の一人がまさに過ちを犯そうとしているという、恐ろしく悲劇的な状況において祈っていたのです。

ペテロ自身は、何が起ころうとしているのか全くわかっていませんでしたが、イエスはすべてをご存じでした。ペテロは答えました。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております」（ルカ

22:33)。彼の認識は甘く、自らの弱さに無防備で、自分を餌食にしようと機会を伺っている存在にも気づいていませんでした。また、神がその全き知恵をもって、---それが究極的にはご自分のしもべたちにとって益であるとはいえ--- サタンが彼らを試みのふるいにかけることをいかにして許されるのかなど、彼は露ほども考えていなかったのです。サタンが、キリストが選ばれた者の一人に墮落をもたらそうと願い、まさにこのことを行うに際して許可を得ていたことは、疑いの余地がありません（ルカ 22:31。またヨブ 1:6-12、2:3-7 参照）。しかし、ペテロははじめにも失敗しようとしていたものの、キリストは彼をお見捨てになるつもりはありませんでした。ペテロに対するお言葉は、その後の失敗を唐突に伝えるものでしたが、それは、ペテロに勝利を与えるという決意に満ちた、憐れみの心からのものであったのです。

このペテロの経験には、あらゆるクリスチャンにとって、思わぬ教訓が含まれています。

それは、誰もが敵の待ち伏せにより、何らかの形で被害を受ける可能性があるということです。自分が失敗することなどあり得ないなどとは、一瞬でも、ものの試しにでも思ってはなりません。過ち、不信仰、高ぶり、虚栄、身勝手、自己中心、俗っぽさ、忍耐力の無さ、不純などの、霊におけるあらゆる罪 --- 悪を行なってしまう可能性、悪に惹かれてしまう性向は、非常に大きいのです。新生していても、サタンの攻撃や策略を避けることができるという保証にはなりません。しかし、ペテロに対する「あなたのために祈りました」という言葉からは、どれほどの励ましと慰めが溢れ出ていることでしょうか。ペテロのために喜んで祈られたのであれば、ご自分に従ってくるすべての者たちのために同じことをしてくださらないわけがありません。「キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです」（ヘブル 7:25）。

ペテロのためのイエスの祈りは、注意深く学ぶだけの価値があります。

イエスが父なる神に対し、ペテロがサタンのふるいにかげられるところから逃れさせてやってくださいとか、失敗することがそもそもありませんようにと祈ってはおられないところが重要です。もしも大いなるとりなし手イエスが私たちをその倫理的責任の大半から解放し、失敗をすることは絶対でないからと保証してくださるなら、私たちは単なる操り人形となってしまう、造り主に何の喜びももたらさない存在となってしまう。私たちは肉においてはまったく弱い存在ですが、失敗を通じてさえ、自分を助けていただける、力の源が備えられていることを学んでいかなければなりません。私たちが自分のためにしなければならぬことを神が代わってくださることはないのです。聖書は道を示してくれています。「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈ってください。心は燃えていても、肉体は弱いのです」（マタイ 26:41）。「しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです」（ローマ 8:13）。「御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません」（ガラテヤ 5:16）。ペテロのためのイエスの祈りは簡潔で単純なものでしたが、それでも「あなたの信仰がなくならないように」という、励ましに満ちたものとなっています。

人が失敗の直後にどういう行動を取るかは、その人の究極の方向性を大きく左右するものとなります。

それで人の気概というものが限界まで試されたり、心の真の状況があらわにされたりするのです。自分がどのような者なのかを知ろうと自らを見つめると、私たちは、神への信頼に加えて自らへの信頼すら捨ててしまいたい衝動に駆られます。したがって、イエスを突き動かしていた懸念は、差し迫ったペテロの失敗ではなく、そこから生まれてくる可能性のある、「実」についての懸念でした。ユダの事例のように（マタイ 27:3-5）、試練を受けて失敗してしまうと、信仰そのものにつまづいてしまうことがあり、それは究極的な悲劇を招いてしまう可能性

があります。その点については、イエスがなぜ、ペテロのために祈られたようにユダのためにも祈られなかったのかという疑問も聞かれることでしょう。もしかして、神は人間の心の奥底までお見通しであるがゆえに、ユダの場合は、心が既にサタンの目指すところに売り渡されていたのに対し、ペテロの場合には、同様に失敗をしたとはいえ、神のみこころを成就したいと願う心をご覧になったということなののでしょうか。私たちがイエスの考えを完全に理解できるかどうかはともかく、はっきりわかることは、イエスは父なる神のみこころだとわかっておられたことに従って祈られたということであり、私たちはそこに平安を得ることができるのです。

ここで、ペテロの信仰が限界まで試みられたということに疑いの余地はありません。

ペテロは主を声高に否定したのではなかったでしょうか。究極の裏切り者ではなかったでしょうか。生意気にも絶対にしないと宣言したことを（訳注：呪いをかけるという）報復まで込めて行なったのではなかったでしょうか。まさにその通りです。そして、サタンがそれを最大限利用しようとしたことにも疑いの余地はありません。しかし、イエスは既に「あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました」と言っておられました。その祈りがおそらくはそのまま答えとなりました。なぜなら、失望の中を漂うペテロが、突如、自らの裏切った主のお言葉そのものを思い出すというのは想像に難くないからです。その言葉は心の中に鳴り響いたに違いありません。彼にとってそれは信仰の言葉でした。彼の魂に再び希望の光を灯すものとなったのです。

このイエスの祈りの結果には、測り知れないものがあります。ペテロの回復は完結しました。

その信仰は失われることはありませんでした。彼は完全につぶされてしまうことはなく、むしろ、主が示されたように、使徒としての傑出した働きを全うし、仲間のクリスチャンたちを強めるところとなったのです。